日本医史学雑誌　第55巻第3号（2009）　369–370

仏教における外科疾患

杉田　暉道

介護老人保健施設　すこやか

受付：平成20年12月18日／受理：平成21年5月1日

1. 蛇毒[1)]

インドでは，気候風土の関係から毒蛇が多いので，これらの毒の害を予防する方法が，いろいろと考えられてきた．すなわち，草が深く茂っている所や，森の中を歩く時は，杖に鈴をつけて音を出すとか，杖で道路の両側をたたきながら歩く．または，おまじないを大声で唱えながら歩くなどの方法が行なわれた．したがって蛇の天敵である孔雀が，一般民衆から非常に尊ばれたのは，当然であった．そして遂に神格化されて，明王として仏教に取り入れられ，その後，孔雀明王といわれ，単に毒蛇を払う神であるばかりでなく，あらゆる病気を取り除き，さらに天変地異を鎮めると考えられるようになり，日本では奈良時代において，この明王を本尊として祈祷が行なわれるようになった．

一方，蛇毒の害を防いだことについて，十誦律に次に示す記事がみられる．

釈迦が舎衛国に滞在していた時の出来事である．出家僧が風呂の水を沸かそうとして，薪を割っていたところ，一本の腐った薪の中にひそんでいた毒蛇が突然現われ，出家僧の指をかんだ．出家僧はこのままに放置しておいたら，蛇毒が全身にまわって死亡すると考え，とっさに咬まれた指を刃物で切断した．これによって毒が全身にまわるのを防ぐことができた．しかし，これを知った釈迦は「これからは，このような場合は，縄で指をくくり，刀で蛇に咬まれた部位を切って毒を出すがよい．」と注意された．

2. 痔[2)]

摩訶僧祇律では，痔を次のように治療したと述べている．一人の出家僧が友人の出家僧の痔を刀で切開して治してやろうと考えて，そのことを師匠に言った．そこで師匠はお前は痔を上手に治すことができるのかと聞いたところ，その出家僧は，友人の痔はよく見える場所にできているので，治療法はやさしいと答えた．これを聞いた師匠は，友達の痔はどこにできているのかと尋ねた．友達は肛門から4横指を横に並べた長さを半径にした円の中にあると答えた．この痔は大きさが小さいので，直接刀を用いて治療できないので，次の方法で治療した．先ず小麦をかんで柔らかくし，これを鶏の糞とまぜて患部に塗り，患部が熟して柔らかくなったら，患部を刀で切りとるのである．

3. 汗臭[3)]

インドでは，高温の為に，汗は他の国民とは比較できない程大量に出るのである．したがって，釈迦は刮汗刀（カツカントウ）という鈍角なやいばの刀を作って，これで汗を取ることを許した．刀の材料には，骨・牙（キバ）・角・銅・鉄・鉛・錫・竹・木などが用いられた．しかし，宝石を用いることは禁じられた．

4. 癰（ヨウ）（できもの）

インドでは，気候の関係から，皮膚病では，癰は最も多い病気の一つであった．そしてこの病気の治療には，次のような方法が用いられた．

1）切開

錐（キリ）または爪で患部を切開するか，熱い鍋の底で患部を温めて，患部が熱くなったら，その部位を切開して排膿した．

2）壊薬（患部を腐食して処置する方法）

摩訶僧祇律では，小麦を噛んで柔らかくし，これと鶏糞とをまぜた物を患部に当てて，皮膚を腐らせ，その患部を開く方法である．また十誦律では，患部を水中に長期間つけて，皮膚を軟らかくし，そして患部を開く方法を述べている．

3）後処置

四分律では，患部の膿を出したら包帯を巻かなくてはいけないこと．膿のために患部が臭かったら，草の根を煮た湯，または小便で患部を洗浄することを教えている．

参考文献

1）杉田暉道．やさしい仏教医学．東京：出版新社；1997, p. 82
2）杉田暉道．やさしい仏教医学．東京：出版新社；1997, p. 84
3）杉田暉道．やさしい仏教医学．東京：出版新社；1997, p. 87
4）杉田暉道．やさしい仏教医学．東京：出版新社；1997, p. 88.